

九州北部豪雨により被災された皆さま方に衷心よりお見舞い申し上げます。



「Bouz Meets Fes 2017」開催決定！ 2017年11月11日(土)鹿児島別院 雅友会も雅楽演奏で出演予定

南島組報恩寺にて雅楽演奏

今年度の夏季研修は、奄美大島で開催いたしました。雅友会、いや本願寺派の歴史の中で、僧侶が奄美で雅楽を演奏するのは初なのは。歴史の1ページに刻まれたことに感慨無量。奄美大島に雅楽の音色が響いたその日は、私たちにとって特別な日になりました。

雅楽がお寺の敷居を

低くした日

南島組報恩寺 三原裕成

私が奄美のお寺に入寺させていたでいて8年になります。北海道出身の私には最初文化や気候、言葉にも慣れず…。気持ちだけは前に行くのですが身体がついて来ないこともしばしばありました。

あるご法事のご縁をいただき、ご自宅でのお勤めを終え帰る時間。そのお宅のおばあちゃんがお孫さんに「お坊さんをお寺まで送ってさしあげなさい。」と言われました。そうしたらお孫さんが「いいけど…お寺ってどこあるの?」と。

この町に1ヶ寺しかないお寺なのに若い方には場所すら知ら

れていないと私自身衝撃を受けました。

そこで、今までご縁のあった方はもちろん、若い方もお寺に関心をもってもらおうとイベントを企画することにしました。

昨年、協力してくださる若い方々とフリーマーケットや子供のミニプールなどをたくさん集めた『寺フェス!!』1回目を開催し、好評を得ることが出来ました。

2回目の今年は、島の人々は島唄や三線に馴染んでいても雅楽を聞いたことのある人はな



なかないはず…ということで、私自身が普段からお世話になっている雅友会にご協力をいただき本堂で雅楽コンサートを開催してはどうかという運びになりました。

そのことを総代や婦人会、友人に報告すると、とても雅楽に興味があるという声が多く、さらには『自分たちも先生方をおもてなしせんば!』と、有難いことにあつという間にその他の演目、出演者も決定しました。

当日は灼熱の奄美でしたが、遠方より島見会長をはじめとした8名の雅友会メンバーにお越しいただき本堂で初めての雅楽コンサートが行われました。前座では、島

に來られ方を歓迎するときに歌われる『祝唄』や奄美で島唄1番を取った仏婦の



方の島唄、島唄教室の子供達、初ステージとなるフラダンスや熱唱された総代の歌謡曲、眠っている楽器を集めて結成された吹奏楽団の演奏などがありました。境内では約25店舗のフリーマーケットも出店されました。

そして大トリに雅楽の演奏が始まると、普段見聞きすることのない生の和楽器の音色に来場者は前のめりになって聞き入っていました。特に酒胡子幻想と越天楽幻想曲は来た方々から「感動して涙が出た」と言っていただき、本堂中が深い感動に包まれていました。

報恩講、お盆やお彼岸等の既存の行事はいつも決まった参拝者で、しかも高齢者ばかりだった本堂が初めて老若男女問わず満堂となりました。お寺と



いう場所で音楽を通じてみんなが1つになり、雅楽の音色でお寺の敷居を低くしていただいた1日となりました。このようなありがたいご縁をいただき雅友会の皆様ありがとうございます。

WALK INN FES 2017

出水組宝樹寺 中村教生

夏といえばいろいろなのを連想する。その感性は十人十色。

眩しい大空に入道雲。夏を一層、夏らしくする蝉時雨。湯ききった喉を潤すには、かき氷がいい。ある方は、浴衣と線香花火といったところだろうか。学生時代を過ごした京都鴨川の納涼床も季節感がある。最近はず語も、一昔前と変わってきているらしい。そんななか、「Fes」も近年、暑い夏をさらに暑く感じさせるキーワードではないだろうか。5月20日(土)・21日(日)と2日間にわたり、鹿児島島のシ

ンボルである桜島の麓、桜島多目的広場にて「WALK INN FES 2017」が開催された。

今年で4回目の開催であったが、世界有数の活火山の豪快な山肌や、その火山との身近な暮らしを間近に感じられる国内でも珍しいFesのようだ。このFesは、ライブイベントにとどまらず、地元ゆかりのアーティストや特産品にも深い関わりを持ち、鹿児島を身近に体感できる新たな夏の風物詩ともなりつつあるようだ。

雅友会は、前回から出演のご依頼をいただき、2年連続2回目の出演。今回は11名の会員で貴重なステージを経験させていただいた。フェス直前には、MBC南日本放送の人気TV番組「てげてげ」で注目アーティストとして取材を受け、ON AIRもされた。

私自身初のFes出演で、桜島が大爆発しないか、正律を奏でられるか懸念していたが、いざステージが始まると、良い緊

張感を感じつつ、この素晴らしい環境で雅楽を演奏させていただけける身の幸せを感じた。

まず路楽で入場すると、辺りは静まり返り、Fesらしからぬ雰囲気があった。楽目の「陪臚」では、軽快かつ力強い迫力ある合奏に聴衆との距離は縮まっていった。さらに「酒胡子幻想」を奏でると、優雅な曲調と壮大な桜島の情景が重なり、最高のシチュエーションで雅楽の魅力伝えることができたと思う。

なかでも、今回初めて取り入れたステージ中の雅楽体験のワークショップでは、楽器に直接触り、試奏もできるということもあり、あつという間に定員となった。参加者の顔ぶれは青年男性・女性が中心だったが、な



かには小学生も。顔を真っ赤にして息を吹き入れ、複数の指穴を押さえるなかで、音を出す難しさを感ずる一幕もあった。

5月31日、10期80日間にわたる伝灯奉告法要が円成となった。多くの門信徒の方々が、新たな宗門の船出を感じられたことだろう。ご門主様は伝灯奉告法要のご親教で「念仏者の生き方」をお示しなられ、私たちの歩むべき姿をお示しくくださった。いわば宗門に携わる有縁の方々のキーワードである。

そして、伝灯奉告法要御満座のご消息では、「仏さまのような執われのない完全に清らかな行いはできなくても、それぞれの場で念仏者の生き方を目指し、精一杯努めさせていただくことが大切です。」と述べられておられる。

日頃の雅楽の研鑽を積み重ねながら、み教えを伝えていくことを忘れてはならない。「念仏者の生き方」のお心を体しつつ、これからも多くの方々とつながりを深めながら、様々なご

縁をいただき、私らしく歩んでいきたい。

WALK IN FES最高のFesでした。雅友会にお声がかかる限り、継続して出演させていただきたいです。

称名



《法話のコーナー》

一万年の涙

〜撰取不捨の仏さま〜

東隅組願成寺 藤 清道

皆さまには、ことあるごとに思い出される方がいませんか？わたしにとっては窪田昭雄さんという方がそういう存在です。京都市左京区一乗寺にある本願寺北山別院というお寺で責任役員総代という役員としてご尽力いただいた方でした。

わたしは8年前までこの本願寺北山別院に奉職させていただきました。

窪田さんとの付き合いは約5年にわたり、それこそ公私問わず可愛がってもらいました。時には「藤くん、しっかりしなさいや！」とお叱りをいただきながら。

わたしが鹿児島に帰ってから4年が経ったある日、突然、窪田さんから電話をいただきました。電話の内容は、実は末期がんで余命は長くて一年ということと、見舞いには来なくていい、葬儀には来てやーということでした。

突然の知らせに、電話を切ったあと思わず泣いてしまいました。いろんなことが思い出されて涙がとまらないのです。そこへスポーツ少年団の練習を終えた息子が帰ってきました。息子はわたしに「どうして泣いているの？」と聞き、わたしは「お父さんの大好きな人が病気になるって、もうすぐ死んでしまうかもしれないんだ。だから悲しくて泣いているんだ」と答えました。す

ると息子は「そうなんだ、それは悲しいね」といつてくれました。わたしは、少しいじわるかと思いましたが、息子にこのよな質問をしてみました。「もしお父さんが死んだらどうする？」と。すると息子は持っていた荷物を放り投げ、わたしを両手で抱きしめながら、「泣く、こやうやうと泣く、泣く、泣く、泣く、泣く」と泣いてくれました。

息子のことばは、素直にうれしいものがありました。その言葉に改めてあることに気付かされました。それは、一万年どころではない、無始よりこのかた、始まりがわからぬほどの久遠の昔から、このわたしを救わずにはおれないと、ずっとずっと涙を流し、わたしにはたらきかけてくださった仏さまがいてくださることを。

十方微塵世界の

念仏の衆生をみそなわし

撰取してすてざれば

阿弥陀となづけたてまつる

(浄土和讃、註釈版 571頁)

わたしたちの仏さまは阿弥陀さま。阿弥陀さまのお手のかたちは「撰取不捨」というお約束のかたちであると教えていただいたことがあります。おさめとって捨てずというお約束。親鸞聖人はこの「撰取」ということばを、「撰めとる。ひとたびとりて永く捨てぬなり。」とお示しくださいました。苦惱の中にしか生きていくことのできない我らを、かならず撰めとるとのお約束です。また親鸞聖人は撰取不捨の「撰取」の字をそれぞれ「撰はもの逃ぐるを追はへとるなり。撰はをさめとる、取は迎へとる」と重ねてお示しくくださいます。ものの逃ぐるを追はへとるなり。ずっとずっと逃げるものをずっとずっと追いかけてそして必ずいだきしめ、見捨てることがない仏さまというお示しであります。撰取不捨、もの逃ぐるを追わへとるなり、阿弥陀さまのお約束はこのわたしたちに今いたりどいています。また今年も窪田さんのご命日が近づいてきました。先立って

いかれた方々も、このお約束により、仏さまとなって、私を包んでくださる。撰取して捨てざれば、阿弥陀となづけたてまつる、南無阿弥陀仏とお念仏をとる。南無阿弥陀仏と念仏をとる。お念仏を称えるとき、窪田さんの人なつつこい顔とあたたかい声が思い出されます。「藤くん、しつかりしいや！」

南無阿弥陀仏
南無阿弥陀仏・・・

朋友紀行5

このコーナーでは、雅友会員の所属寺のご紹介いたします。第五回目は、雅友会鳳笙管頭、南薩組顯證寺の藤直亮氏です。

長い念仏禁制の時代が終わりを告げた明治の初頭、南さつま万世の地では、開教の布告の1か月後に早くも最初の御法座が勤められています。その後「大崎ヶ浦説教所」の設置を経て、

明治18年に当地に「等雲山顯證寺」が開設されました。

この土地は、江戸時代から中継貿易等で栄えた港のあった場所、当時の南薩地域の中でも物流の拠点であり、鹿児島県内でもいち早く寺院の開設が行われたようです。地理的に西南戦争の被害もあまり受けず、経済的なダメージも少ない地域でしたので、鹿児島別院の開設にあたっては、当地の豪商の方々を中心にも多大な貢献をした土地でもあります。しかしながら、時代の変遷とともに海運は下火になり、地域経済も元気をなくしていききました。その対策として

航空輸送のための基地を地元有志を中心に建設中、開戦となり、その施設が接収されて「万世特攻基地」として使われる



など、戦争の歴史を刻んだ場所でもあります。

このよな歴史を経てきた顯證寺でありませんが、近年

では県内各地域と同じように、少子高齢化の流れの中での寺院運営であります。その中でも日々受け継がれてきた木造本堂の保存修復工事、時代のニーズに合わせた納骨堂・門徒会館の建設工事等を行い、一人でも多くの方に念仏の教えに出会っていただける場をと歩んでおります。お近くにお越しの際はどうぞお立ち寄りください。



☆雅友会へのお問い合わせ

鹿児島教区教務所内雅友会事務局

099-222-0051

(担当) 片岡

雅友会ホームページ

<http://www.hongwanji->

[kagoshima.or.jp/gayukai/](http://www.hongwanji-kagoshima.or.jp/gayukai/)